

〔カンショ〕

1. 作付の概況

2008年度の全国の作付面積は前年産と同じ40,700haで、九州は19,700ha(前年対比2%増)であった。これは全国的に農家の高齢化による労働力不足等で作付けが減少する中、宮崎県で醸造用の作付が増加したことによる。全国の10a当たり収量は2,480kgで、前年産との対比で4%上回った。収穫量は1,011,000tとなり、前年産に比べて42,600t(同4%)増加した。10a当たり収量が前年を上回った理由は、九州や四国ではおおむね天候に恵まれ、いもの肥大が前年産に比べて良好であったことによる。

2. 作柄の概況

九州(沖縄を除く)の10a当たり収量は2,740kgで、前年より多収となり、九州全体の収穫量は540,600tであった。

鹿児島県では、植付期の4~6月にかけて平均気温は平年並みで推移し、適度な降雨があったことから苗の活着は順調であった。梅雨明けは平年より早く、その後の日照時間は平年より多かったものの、降水量が少なかったため地上部の生育はやや抑制された。しかし、8月以降は平年より降水量や日照時間が多かったため、地上部の生育は回復した。マルチ早掘栽培では、着いも数は平年並みで、収量は平年よりやや多かった。一方、無マルチ栽培では着いも数は多かったが、1個重が軽かったため、収量は平年よりやや少なくなった。以上のことから、本年の鹿児島県の10a当たり収量は2,860kgで、前年産を220kg(8%)上回った。また、収穫量は400,400tで、前年に比べて30,800t(8%)増加した。

宮崎県では4月から5月にかけて平年より降水量が少なかったが、苗の活着にはほとんど問題はなかった。6月の降水量は多かったが、梅雨明けが早く、その後、8月中旬まで降水量が平年より少なかった。そのため、8月収穫のマルチ早掘栽培では、地上部の生育が平年よりやや劣り、1個重も少なかったため、収量は平年よりやや低収になった。8月下旬以降は平均気温が高めに推移し、日照時間は少なかった。10月以降収穫の標準栽培については、地上部重、着いも数は平年並みで、収量は平年並かやや多かった。以上のことから、宮崎県の10a当たり収量は2,710kgで、前年産を270kg(11%)上回った。収穫量は90,500tで、前年に比べて17,300t(24%)増加した。

2008年度カンショ作付面積と収穫量

区分	作付面積	10a 当たり 収量	収穫量	前年産との比較				
				作付面積		10a当たり 収量		収穫量
				対差	対比	対比	対差	対比
(ha)	(kg)	(t)	(ha)	(%)	(%)	(t)	(%)	
全国	40,700	2,480	1,011,000	0	100	104	42,600	104
九州	19,700	2,740	540,600	300	102			
福岡	180	1,410	2,540	△ 10	95			
佐賀	115	1,900	2,190	△ 1	99			
長崎	550	1,710	9,410	△ 1	100	110	870	110
熊本	1,230	2,400	29,500	0	100	104	1,200	104
大分	313	1,930	6,040	1	100			
宮崎	3,340	2,710	90,500	340	111	111	17,300	124
鹿児島	14,000	2,860	400,400	0	100	108	30,800	108
沖縄	259	1,650	4,270	8	103			

注)平成20年産かんしょの収穫量(農林水産省統計部 平成20年2月10日公表)に基づいて作成
前年産との比較における空欄は周期年での調査を行っている主産県以外の県で、前年産のデータなし